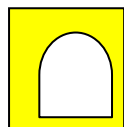


# 日吉台地下壕保存の会会報



第103号

日吉台地下壕保存の会

## 第15回戦争遺跡保存全国シンポジウム神奈川県横浜大会 「戦争遺跡を平和のための文化財に！」 盛会・好評裡に幕を閉じる 来年度は三重県鈴鹿で全国大会



敗戦から66年、第15回戦争遺跡保存全国シンポジウム神奈川県横浜大会は8月6日(土)～8日(月)まで3日間に渡り、慶應義塾大学日吉キャンパスに於いて開催されました。神奈川県で実施されるのは第5回川崎大会に次いで10年ぶり2度目、今回は慶應の協生館藤原洋記念ホール、来往舎という素晴らしい施設に全国から戦争遺跡の保

### 目次

第15回戦争遺跡保存全国シンポジウム神奈川県横浜大会	1p
日吉台地下壕活動報告(全体会) 新井揆博	3p
大会アピール	3p
分科会発表 渡辺清・長谷川崇・中沢正子	4p
分科会報告 谷藤基夫・石橋星志・幅国洋	6p
見学会報告 喜田美登里・小平克・中島せり奈・大泉雄彦	8p
写真展 喜田美登里	11p
交流会風景・新聞記事	11p
連載 地下壕設備アレコレ【その3】 山田譲	13p
お知らせ 横浜の外人墓地めぐりバスツアー	14p
日吉をガイドする講座第6回・第7回	14p
新刊案内 『本土決戦の虚像と実像』	15p
活動の記録	15p

存に関心を持つ方々が集まれ、講演に、報告に、分科会討議に、見学会と熱心な話し合い、交歓、見学が行われました。

大会初日の開会集会には清家篤慶應義塾長、武田岩夫港北区副区長が、歓迎の挨拶をされました。清家塾長は、「慶應は戦災を大きく被った大学の一つである」と自己紹介され、「地下壕は私たちが歴史を学ぶための重要な施設である。」と位置づけられました。更に「どうして戦争が起こったのか、なぜ防げなかったのかを考えるため、保存する価値がある。」と話されました。また歓迎アトラクションとして人形劇団ひとみ座の乙女文楽「二人三番叟」が華麗に舞われ、観客を魅了しました。その後白井厚慶應義塾大学名誉教授が「戦時下の慶應義塾と戦争遺跡」と題して、序幕の大正デモクラシー期から第1幕第2幕と戦争がはじまり、学徒出陣、日吉に海軍が来る過程、敗戦、接收、遺跡保存と戦後ご自身が行った慶應義塾関係戦没者調査について、演劇になぞらえて講演されました。



挨拶 清家篤慶應義塾長



乙女文楽「二人三番叟」人形劇団ひとみ座

夕方には生協食堂に於いて全国交流集会が行われ、手話ダンスやひとみ座のひょっこりひょうたん島人形操作のアトラクションもあって、全国の戦争遺跡保存に取り組む仲間たちと盛り上がった交歓が行われました。

2日目の分科会、閉会集会で大会アピールが採択されました。そして、3日目の見学会と3日間の大会全体では全国からの参加者も含め延べ600人以上が、参加し、大会は好評、盛会、成功裡に幕を閉じました。

基調報告として十菱駿武全国ネット共同代表は、1995年の文化財指定基準の拡大以降20年間の市民運動の高まりの中で指定・登録された戦争文化財は昨年度より21件増えて188件となっていることなど、全国の戦争遺跡の置かれた状況について報告されました。また沖縄(村上有慶全国ネット共同代表)、日吉(新井揆博日吉台地下壕保存の会副会長)、登戸(渡辺賢二登戸研究所保存の会共同代表)がそれぞれの地域の活動について報告されました。



記念講演 白井厚慶應義塾大学名誉教授



全体会活動報告

## 日吉における戦争遺跡の特徴

日吉台地下壕保存の会 新井 揆博

- 1 大学の「学び舎」が海軍中枢の軍事施設になった  
第一校舎・寄宿舍（浴場共）・柔剣道弓術空手及卓球道場・赤屋根食堂・体育専用室・学生文化団体（専用室）・教会堂（チャペル）などを含め5万坪のキャンパス（海軍省と貸借契約部分）。  
特に、連合艦隊司令部として位置づけられた寄宿舍は谷口吉郎（文化勲章受賞者）氏の設計によるもので、日本モダニズム建築の開拓者であり東京国立近代美術館などを設計している。
- 2 500名の予科塾生が陸上競技場から「学徒出陣」（慶應義塾全体で3000名～3300）  
慶應義塾大学では、アジア太平洋戦争敗戦までに戦没した学生や卒業生・教職員は2225名
- 3 海軍は農家から土地の強制収容・屋敷の強制移動をさせた
- 4 海軍は5000mの地下壕を築造した
  - ① A 連合艦隊司令部（海軍総隊司令部）地下壕  
B 軍令部第三部（情報部）・東京通信隊・航空本部地下壕
  - ② 軍令部第三部（情報部）待避壕
  - ③ 人事局・経理局地下壕
  - ④ 艦政本部地下壕
- 5 海軍は日吉から前線に何を司令したか…本土決戦にむけ全てが特攻作戦
- 6 日吉のまちは空襲にさらされる  
日吉台国民学校…学区のお寺に学童疎開・人事局功績調査部の接收・そして空襲  
日吉地区を襲った主な空襲…1945年4月4日、4月15日～16日、5月24日  
宮前地区 31 軒中 25 軒焼失。箕輪地区 50 軒中 25 軒焼失。大門地区 20 軒中 18 軒焼失。  
慶應義塾大学工学部建物の80%焼失。



活動報告 新井揆博氏

大会アピール

## 『戦争遺跡を平和のための文化財に』

2011年8月6・7日の両日、第15回戦争遺跡保存全国シンポジウム神奈川県横浜大会は、慶應義塾日吉キャンパスを会場に開催されました。参加者は、地元神奈川県はじめ全国各地から380名が参加しました。

大会開催にあたり会場を提供いただいた慶應義塾の関係者の皆様、後援いただいた横浜市港北区、神奈川新聞社、現地実行委員会に参加され、裏方に徹してご尽力いただいた皆様に感謝申し上げます。

今大会の開催地神奈川県では、ここ慶應義塾日吉キャンパスに連合艦隊司令部の大地下壕が、明治大学には登戸研究所が、蟹ヶ谷、貝山、野島等にも多数の戦争遺跡が残され、かつての戦争がもたらした恐怖と狂気を語り続けています。また横須賀、厚木はじめ米軍関連の施設が14配置され、沖縄県の34に次いで日本で2番目の米軍基地を持つ県となっています。今大会のテーマは『戦争遺跡を平和のための文化財に！』です。全国で史跡・文化財として

指定・登録された戦争遺跡は8月6日現在188件に増加してきています。文化庁は分布調査および詳細調査を経て、『近代遺跡調査報告書⑨(政治・軍事)』を発刊すると明言していましたが、8月5日の文化庁との懇談では「来年度には刊行したい」との回答でした。

私たちの目の前で全国各地の戦争遺跡が次々に消滅・解体され、閉鎖されています。戦争遺跡を保存し平和のために活用する活動の拡充が急がれています。戦争遺跡に戦争の持つ本質を語らせ、若い世代に継承し平和の学びの場としていくことが重要です。

大江・岩波訴訟の最高裁判決は沖縄戦の史実を後世に正しく伝える上で大変重要な意義をもつものでした。その一方で横浜市では戦争肯定の立場で書かれた『新しい日本の歴史』が採用されるなど、侵略戦争の事実を隠蔽し、子どもたちの歴史認識を歪めようとする動きが強まっています。戦争遺跡を活用し、戦争のない世界を求めている私たちはこの動きを看過することはできません。私たちの戦争遺跡保存運動も、戦争遺跡を戦争賛美の場に利用されることのないよう活動を強化していかなければなりません。

今大会では記念講演で白井厚さんより、慶應義塾日吉キャンパスでの戦争遺跡の保存と活用の実際と意義が話されました。基調報告及び3名の報告者からは、全国及び各地での取り組みが話され、私たちの運動の課題が明らかにされました。分科会では、各地の戦争遺跡保存の取り組み、ガイド活動の充実、調査活動の成果、次世代への継承のセンターとしての平和ミュージアム建設・活用の取り組み、町作りの中に戦跡保存や平和ガイドを位置づけた活動、地域の特色を活かした様々なとりくみ等が報告されました。2日間の学習・討論を通じて、全国の取り組みに深く学ぶことができました。今大会での成果がそれぞれの地域、組織の活性化に繋がるものと確信します。

文化庁の報告書が契機となり、各都道府県教育委員会を中心とした文化財指定へ向けた取り組みも始まる事が予測されます。報告書の発刊が来年度以降に遅れるとしても、いままで蓄積してきた戦争遺跡保存運動に学び、全国各地で議会や行政に働きかけ、文化財指定・登録・保全・活用の運動をいっそう前進させていきましょう。

2011年8月7日

第15回戦争遺跡保存全国シンポジウム神奈川県横浜大会

#### 分科会発表

### 2年余りつづいているガイド学習会について

日吉台地下壕保存の会 渡辺清 長谷川崇 中沢正子

★はじめにガイド学習会に至るまでの経過を述べるが、これは保存の会の歴史でもある。

★日吉台地下壕保存の会の結成と地下壕見学会

\*1989年4月、日吉台地下壕を調査していくうちに、地下壕のもつ歴史的な意味の重さを感じ、戦争と平和を考える原点として、地下壕を永久に保存しなければという思いに至った。前年、横浜市や港北区の職員の方々がこられ、地下壕を史跡として何らかの形で残せないだろう



講演者 渡辺清 長谷川崇 中沢正子

かということで、地下壕を案内したのがきっかけで「地下壕保存の会」結成に向けて動き出した。  
(会報1号)

★地下壕見学会 1989年5月21日開催、電話・はがきで申し込み、長靴、懐中電灯。農家の庭先からはいるので、迷惑にならないよう。(会報1号)簡単な見学会レジュメ配布。

★農家の庭先からはいることは10年以上つづいた。前もって電話連絡し、当日は玄関への通路の途中にある出入口から、入口近く物置として使用されている壕に入れてもらった。

★地下壕の整備完了

★2001年3月慶應義塾は連合艦隊地下壕の整備工事を完了。まむし谷にふさいであつた出入口を見学用入口に開き、壕内に流入していた大量の土砂を取り除き、民家との堺をアルミサッシの遮蔽戸で封鎖し、マンホールに蓋がされ、50箇所にライトがつけられた。

★見学会は日吉キャンパス事務室で申込用紙に認めをもらい、警備室で鍵を借りた。現在は警備室に時間を申出ると警備員が鍵を開け、壕の出入口で待機してくれている。

★地下壕見学者の増加

★2001年度、見学者が1100名をこえた。地元の小・中学校の見学会が可能になった。

★2004年度、「ガイド養成講座」を設けるなど、案内人を養成する必要がでてきた。

★見学会ガイドラインの検討から「日吉地下壕入坑ガイドライン」実施へ

★2004年10月、地下壕出入口近くで土砂崩れ。安全管理のため慶應義塾と検討。

★2005年度、慶應義塾総務部、日吉キャンパス事務センターの「入坑ガイドライン」の提示により実施。入坑の資格、傷害保険加入、取材活動、入坑手続き等明確になった。

★「ガイド養成講座」開講とガイドブック刊行(港北区ふるさとサポート事業に応募)

①「ガイド養成講座」は2005年度(全5回)、2006年度(全4回)、2007年度(全5回)開催。現代史講座、ガイド心得、フィールドワークをセットする。その後も独自継続中。

②ガイドブック『戦争遺跡を歩く 日吉』日吉台地下壕保存の会編 2006.1を刊行。小学6年生対象に編纂。小中学生無料配布、一般見学者は有料配布(保険料、資料代として800円)。必要に応じて改訂増刷。ふるサポ事業で3年間に約50万円の助成金を受ける。

★ブックレット『学び・調べ・考えよう フィールドワーク日吉・帝国海軍大地下壕』日吉台地下壕保存の会編 平和文化 2006.8刊行 必要に応じて改訂増刷。

★戦争遺跡保存全国シンポジウム2008.8 東京大会(一橋大)「日吉台戦争遺跡ガイド養成講座を受講して」を第1分科会で渡辺清氏が発表。

★2007年11月『「日吉ミュージアム」づくりの提言』を慶應義塾長安西祐一郎氏に提出

★2010年3月『「日吉ミュージアム」づくりの提言』を慶應義塾長清家篤氏に提出

★2008年9月、軍令部第三部使用の地下壕入坑部がまむし谷体育館建設時に見つかり、慶應義塾は「日吉台地下壕に関する諮問委員会」の審議を経て、体育館を北に60m移動し建設。2009年4月公開見学会、5月地下壕を調査し、埋戻し保存することになった。

★上記のあと他県からの平和学習・修学旅行の申し込み増加。10名程度のガイドで案内。

★2009年3月「日吉をガイドする講座」5回まで開講。日吉の地理、歴史、自然等学ぶ。

★見学会は2通りある

①定例見学会 事前申し込み 日吉台地下壕保存の会主催 当会より慶大運営サービスに申請 毎月第4土曜13時～16時 日吉駅集合 受付 会費徴収。

②団体見学会 ウィークデイ 各団体・慶大運営サービス・当会ですり合わせ実施。

**★見学会の説明案内とガイドの態勢**

- \*日吉来往舎にてガイドンス(トイレ)→第一校舎前→地下壕内 7～8 箇所→チャペル→日吉の丘公園遠望・艦政本部地下壕→弥生式住居址・耐弾式堅穴坑→寄宿舍→来往舎。
- \*新旧 10 名程度のガイドで当日参加可能なガイド(最低3名)が、案内ポイントで交代して説明。以前は全ポイントを1人で説明していた。壕内点灯と消灯。ライトの点検。
- ★ガイド学習会 2009 年6月～2011 年5月までに 17 回開催
- \*開催に至る理由:「新ガイドより養成講座を受けたがガイドマニュアルがなく困惑した」「説明が間違っている」「必ず説明する事柄がある」「自分なりのニュアンスを入れる」「マニュアル通りに固まっては困る」等々発言があり、自分で書いた説明文を持ち寄り勉強会を開いた。課題は次々と出され、次の宿題となり、1ヶ月半～2ヶ月後の会合を約束して散会した。その約束だけで毎回6～7名が参加している。
- \*ガイド学習会の記録より:「何のためにガイドするのか」「何のために地下壕を保存しようとするのか」「どのような見学者に対してどんなガイドをするのか」「ガイド内容を裏付ける資料集の作成」「港北区の空襲地図の作成」「聞き取り調査の報告」等。
- \*見学者の感想からみると、20 名以下の人数で、ガイドがポイントごとに交代で説明し質問も出しやすい雰囲気の時、心に響く見学会が成立するようだ。
- \*成果として、
  - ①各説明ポイントの新たな説明文を役割分担して執筆。「ガイド事例集」としてまとめる。執筆者の意向に沿って〇〇氏の事例とし、特色を生かすこととした。
  - ②宿題として出された資料集め、資料調査(聞き書き等)で得た資料コピー等をリストアップし、資料集を作成する。
- \*学校関係見学会については茂呂氏の各校別見学会メモの集積がある。
- \*今後も新説が出てきた場合とか、新資料が発見された場合には補充する必要がある、この会を終わらせてしまうことは出来ないと思う。必要に応じて開催されることを願う。

**分科会報告****○第1分科会(52人参加)**

本会からは中沢、長谷川、渡辺3氏が共同で「2年余り続いているガイド学習会」の報告を通してガイド事例集が作成される過程を発表された。ガイド活動をする上での課題を共通理解し、次のステップに繋がる報告であった。松代からやはりガイド活動について報告されたが、トロッコやダイナマイトの模型を見せて、具体的に説明するガイドの方法は大いに参考になるものであった。神奈川から「貝山地下壕を保存する会」が三浦市本土決戦陣地遺跡と逗子・池子弾薬庫の二つの調査報告を行い、活動の広がりを感じさせた。731部隊遺跡世界遺産登録を目指す会の報告は未だ被害に苦しむ人がある中で「謝罪碑」を建設する報告であり、日中の中で戦後未だ終わらずと重く考えさせる報告である。「亀島山地下工場(岡山)」「鈴鹿海軍格納庫(三重)」と戦争遺跡を取り壊やし、埋め立てようとする行政の姿勢に対して、保存と活用を訴え、議会に働きかける市民の活動が報告された。どちらも状況は厳しく、多面的な活動と支援が求められている。特攻機「桜花」発射台の保存に取り組む千葉の発表は農業者の方々の発表であり、新しい会ながら地主の方の理解を得て着実な活動が報告された。どの発表も地元での粘り強い活動の報告であり、かつて多かった戦争遺跡の所在報告的な発表を乗り越え、じっくりと取り組んだ活動の深まりを感じさせるものであった。

(文責: 谷藤基夫)





第1分科会発表風景

## 第2分科会

第2分科会は、来往舎大会議室を会場に行われた。報告者とタイトルは報告順に次の通り(敬称略)。清水啓介(戦争遺跡研究会)「防空偽装の戦跡調査」、林宏美(日吉台地下壕保存の会)「海軍気象部分室の大倉山移転とその活動について～大倉精神文化研究所所蔵資料の調査と聞き取りから～」、大西進(郷土史河内どんこう編集委員)「大阪府八尾に残る戦争遺跡旧陸軍大正飛行場にかかわる戦争文化財」、菊池実(戦跡考古学研究会)「学校に兵隊さんがやって来た 1945(昭和20)年、青葉兵団の群馬県移駐」、石橋星志(日吉台地下壕保存の会)「軍都相模原の戦争遺跡悉皆把握の試み—新編相模原市史市民ボランティアの成果を中心に—」、阿藤満政(松代大本営の保存をすすめる会)「地下壕掘削工法—コンプレッサー復元想像図—」、平川豊志(松本強制労働調査団)「戦争遺跡の木質遺物Ⅳ」、小野逸郎(北九州に平和資料館をつくる会)「三式十二糎高射砲陣地跡の発掘調査と保存への取組み」以上、8名の報告が午前午後、各4本ずつ行われた。

会に関わるもののみ紹介すると、平川報告では日吉の地下壕から収集された木片の分析であり、コンクリートの型枠は杉板の良いもの、「木レンガ」といっているものはアカマツだが良くないもので、状態も悪いとのことだった。また、「木レンガ」という呼称は誤解を生じ、不適当ではとの指摘もあった。新しい視野からの研究で、勉強の必要性を感じた。質疑では、「濡れている木材は乾かさない方が保存に良い」などのアドバイスをいただいた。

林報告は、大倉山での海軍気象部の活動を、研究所に残る資料と聞き取りの成果からまとめたものだった。資料の限定はあるが、活動の一端が明らかになった。ただし、会場では水路部や気象部についての認識が弱く、質疑が不十分になったのは残念だった。

最後に、私の報告は、相模原市の戦跡調査の端緒として、新井揆博氏の神奈川県戦争遺跡一覧に、既存の研究や報告書の成果を加え、相模原に最低存在する戦争遺跡の数を明らかにしたものだった。悉皆調査を少人数でどう行うのかの問題提起の側面もあった。いくつか質問もいただき、今後の励みを得ることができた。

(文責 石橋星志)

## 第3分科会

第3分科会では7本の報告があり、内容的には次のように整理されます。①平和博物館の役割(山梨・登戸)②行政(自衛隊・大学等を含む)との関わり(市ヶ谷・登戸)③地域づくりへの活用・地域への発信(千葉館山・京都・山梨七里岩)④「次世代への継承」の方法(専大付属高歴史社会研究会)

報告者、参加者の発言を通じて特徴的だったのは以下のような点でした。



講演者 森田忠正氏

○平和博物館が展示や学習活動を通じて戦跡保存・活用運動、平和教育の拠点、センターとしての役割を果たしていること。

○自衛隊の「壁」の向こうにある戦跡についてどのような働きかけが可能なのか、また大学構内に残る戦跡の保存についての展望。

○「戦跡」にこだわらず身近な「モノ」から戦争を考える意味。

分科会全体としては、参加者の関心に沿って討論が発展したと思います。何より、高校生が参加し元気に報告をしてくれたことは画期的であり、大きな励みになりました。

(文責 幅国洋)

## 見学会

### ○日吉台地下壕見学会

喜田美登里

全国大会の会場にフィールドワークを行う「戦争遺跡」がある所も珍しいかもしれません。日吉台地下壕の見学会はその地の利を活かして、遠方から参加される皆さんがご都合に合わせて見学できるようにと、8月6日朝の「短縮コース」、8月8日午前・午後のコースを組んでみました。計3回に97名の参加者がありました。6日は全国ネットの総会が始まる前の短時間に地下壕を中心のコースでしたが、54名と参加者が多く、ガイドも時間に追われて充分なご案内ができなかったかもしれませんが、8日には他の見学にも行かれたと思います。夏の朝、キャンパスの木々にはクワガタやカブトムシが活動していました。

8日は日吉台地下壕と明治大学の登戸研究所の見学をそれぞれ午前・午後に組み、フレキシブルに参加していただくようにしました。日吉はガイド6人で案内をしましたが、8日には横須賀軍港コース案内に4人が出かけて、10人ほどのガイド総動員となりました。

大会直前に「夏休み見学会」として3回見学会があったので、大会終了時には地下壕ガイドはバテ気味でしたけれど、見学会参加の皆さんから好意的な感想を頂き、大変うれしく思っています。



日吉台地下壕見学会

### ○明治大学平和教育登戸研究所資料館と大学構内の戦争遺跡見学 報告

登戸研究所保存の会運営委員 小平 克

8月8日、小田急線生田駅に近い明治大学生田校舎キャンパスに集まった見学参加者は、午前21名、午後25名だった。案内をしたのは、20年以上にわたって登戸研究所の実態解明を進めてきた渡辺賢二氏。大学構内の遺跡巡りは炎天下ということもあって30分程度で切り上げ、冷房の効いた登戸研究所資料館内の展示説明と交流会の時間を多くした。言うまでもないことながら、旧陸軍登戸研究所は全国の数ある戦争遺跡のなかでも特異な存在である。



参謀本部直轄の最高機密を要する極秘の中  
枢基地として、謀略戦に必要な武器資材等の  
研究・開発・製造を行っていた特殊施設であ  
った。そこで行われていたのは当時の最先端  
の軍事技術であったばかりか、非人道的であ  
って戦時国際法規にも違反するものを多く含  
んでいたの、研究所関係者の秘密厳守は徹  
底され、敗戦時における証拠隠滅も完全にな  
されたので公文書などからはその概要を知る  
手がかりが全く得られないという戦争遺跡で  
ある。

キャンパスに残る僅かな遺跡を巡りながら  
の渡辺賢二氏の話は、このように秘密のベールに覆われていた登戸研究所の実態がどのような経過で解明が進み、こんにち「明治大学平和教育登戸研究所資料館」が開設されるに至ったかに重点の一つがあった。そこには市民と高校生による手探りの地域の歴史掘り起こし活動、とくに高校生の真実を知りたいという熱意が関係者の重い口を開かせたこと、また多くの偶然が幸いしたことなどが生き生きと語られた。そして「旧陸軍登戸研究所の保存を求める川崎市民の会」とかつての勤務員たちが集う「登研会」の強い思いが、明治大学内の全学的議論を経て全国にも稀な当時の遺構をそのまま生かした資料館建設を決意させたという。



登戸研究所見学会

資料館はクーラーが効いて快適だった。決して広いとは言えない規模だが、そこには当時の世界とアジア、そして日本の状況の中で登戸研究所の果たした役割がぎっしり詰まって展示されている。じっくり見たら数時間は要する内容である。だが渡辺氏はまことに要領よく展示企画の中心にあるポイントとなる展示品を説明し、30分ほどで各展示室を廻り終えた。参加者には十分にエキスを理解していただけたと思う。



登戸研究所見学会

渡辺氏の展示説明の後エントランスで交流会を持った。はじめに、「登戸研究所保存の会」の会員中島光雄氏(84歳)が名古屋造幣廠での風船爆弾製造の体験談を語られた。また、「松代大本營の保存をすすめる会」ほか各地の参加者から突っ込んだ質問がなされた。渡辺氏はそれらに丁寧に答えつつ、登戸研究所についてはこれから解明すべき課題が山積していると述べた。最後に、「保存の会」代表世話人の一人である大図建吾氏が、資料館の研究成果を市民全体のものとして普及していく活動とともに、展示内容が今後とも変質しないよう見守っていく決意を述べて閉会した。

## ○貝山・野島より望む

中島せり奈

京浜急行追浜駅よりバスで向かい最初に目にしたのは、数個の洞穴に巨大なタンクが連立している光景であった。駐車場の傍らに現存するこのタンクは航空機の燃料庫であったようだ。追浜が海軍航空隊・予科練の地であったことは頭にあったが、実際に巨大なタンクを目にしてハッ！とさせられた。海軍航空技術廠の施設の一部が今も工場の倉庫として使用されていて、遠くから見る事ができた。

本土決戦に備えて掘った貝山地下壕へと向かう。壁には複数の小さな穴が空いており、爆薬を仕掛け砕き手で掘っていった当時を連想させる生々しさが残っていた。棚が段々と掘り込まれていて珍しかった。貝山の名の通り貝が所々顔を覗かせている。

続いて野島掩体壕へと向かった。野島公園にはキャンプ場や自然海浜があり、のどかな風景が広がっていた。野島山のど真ん中を掩体壕は貫いていて、その大きさに圧倒される。日吉や赤山もプロがつくったといわれるが、完成を前に敗戦を迎える。横浜市の案内板が2枚大きくあり、規模や時代背景が記されていた。遺跡の保存を切に訴えてきた成果であろう。炎天下の中展望台を目指した。先ほどの貝山そして夏島さらに横須賀・猿島が見渡せた。眼下に追浜飛行場のテスト滑走路(現日産自動車工場)をはっきりと見る事が出来た。ここに立ち鳥瞰し、横須賀鎮守府を筆頭にこの一帯が海軍の要塞地帯であった事を改めて考えさせられた。野島夕景や追浜の風光明媚な地も海軍の町へと変貌していった戦時下、1945年8月30日に米軍追浜へ上陸、米海軍・海上自衛隊の艦船が沖を航行している現在。なんだか複雑な思いに駆られ、寒気立ってきた。

戦争遺跡は想像力を働かせ過去に迫る手段として、とても重要な役割を担っていると私は思う。過去に迫り向き合い、未来を見据えていま自分に出来ることは何か！この見学会を糧にこれからも問うて行動していきたい。

#### ○ 戦前も今も変わらない軍港・横須賀 ―大会三日目の現地見学雑感― 大泉雄彦

子どもの頃よく行った円覚寺の案内板「明治22年、軍事要衝と東京を結ぶ必要から、当境内を買収し国鉄横須賀線が建設され云々」が、初めて横須賀に興味を持ったきっかけだった。



横須賀軍港・猿島要塞見学会

京浜急行汐入駅に集合した25人。山田譲さんのガイドで、歩いて軍港クルーズ乗り場へ。船は10年ぶりなので、身体はオジサンでも気持ちは少年。

デッキは強い日差しだが、気持ちいい風。解放感ある海なのに、見える船は不気味。原子力空母ジョージワシントンは「太平洋のどこかで活動中」とかで居なかったが、目の前に停泊の米軍艦の巨大さに圧倒される。海上自衛隊の船にも。若い声の船内ガイドは客を飽きさせず、一周40分はあっという間。こういう案内を我々もしなければ…。

午後に渡った猿島は、完全に若者・家族の海水浴場。しかし、坂を少しずつ上ると、雰囲気は一変。弾薬庫や長いトンネルの見事なレンガ造りは、碓氷峠トンネルを思い出す。ともに明治期の職人の匠の技。

しかし、こちらは帝都防衛の海の要。人殺しのための建築物であることを忘れてはならない。

新井揆博さんのガイドが冴えわたる。猿島の大砲は、明治大正期は敵国船には火を噴かず。太平洋戦争では高射砲が設置され、米軍機相手に活躍。馬蹄形ではなく円形の台座もしっかり残っていた。

天気に恵まれ、名ガイドの統率のおかげで全員怪我なく終了。

唯一、嫌な思いは、旧海軍鎮守府(現・米軍司令部)前を通った時。参加者が撮影した途端、米軍の日本人警備員が禁止だ！と執拗に罵声。参加者みんな素知らぬふりして撮影。最後尾で追い上げてた僕が警備員に呼び止められた。曰く、禁止だと言ったろう！カメラから削除しろ！

現地見学行動に迷惑かけられないので、仕方なく削除。参加者が心配そうに一緒に居て下さ



ったのでこの程度で済んだけど、もしも独りだったら…。海上は撮影し放題なのに…。

最後に。読売新聞の岡本記者(横浜緑区出身)が同行。8月17日の文化面に猿島の記事が掲載された。写真に写っているのは…。関心ある方はご覧あれ。(P12 新聞記事参照)

(山田付記-----米軍の高圧的態度は「tomodachi 作戦」の裏側の実態を見る思いです。猿島の要塞地下施設跡には「愛のトンネル」と看板に書かれていてみんな哑然。)

## 写真展

### 全国の戦争遺跡写真展

喜田美登里

今回の神奈川横浜大会では8月2日より6日間、来往舎1階のイベントテラスで「全国の戦争遺跡写真」の展示を行いました。全国ネット参加団体のうち16団体の戦争遺跡の紹介写真・コメントのほか、「戦時下の慶應義塾」「東北大震災と文化財(山梨学院大学考古学研究会)」などをパネル19枚、28面に展示しました。今回は事務局において全国ネットの紹介文も加えていただきました。

ガラス張り・吹き抜けのイベントテラスのフロアは隣りで書籍の展示交換会も行われ、暑い毎日でしたが全国大会開催中の休憩・交流の場にもなったかと思います。展示に足を止める夏季スクーリング中の学生も見かけられました。

「全国の戦争遺跡写真」は、10年前の神奈川川崎大会の時に全国ネット

の皆さんに依頼して、各団体A3判5枚程度の展示物を作っていただきました。以後、毎年各地で開催される全国大会に展示されてきました。第2回南風原大会で、南風原文化センターが企画された「戦争遺跡展」を毎年継続できないものかと考え、展示物をコンパクト化したものです。カラーコピーが安くなってきた頃でした。

今回、50団体近くになった参加団体をできるだけ紹介できる展示をと思いましたが、各団体A3判5枚では、スペースに恵まれた来往舎イベントテラスでも展示しきれません。

大会の開催地で、戦争遺跡と保存運動をより理解していただくために展示は必要だと思います。各団体A3判2枚にまとめたものであれば、広い展示場がなくてもファイルにして閲覧できると思いますが如何でしょうか？



全国の戦跡写真展

## 交流会











約300人が参加したシンポジウムの講演会  
—横浜市港北区の慶応大日吉キャンパス

主に第2次世界大戦で用いられた施設を「戦争遺跡」として保存し、後世に伝えることを目指す「戦争遺跡保存全国シンポジウム」が6日、横浜・日吉の慶応大日吉キャンパスで開催された。戦争経験を語ることでできる世代が減っていく中で、「モノ」を通じて歴史への想像力を働かせる意義を再確認させた。(斉藤 大起)

## 戦争遺跡保存シンポ

# 歴史への想像力を

研究や市民がつくる「戦争遺跡保存全国ネットワーク」が主催する国内有数の催しで、15回目。7、8の両日には分科会や見学会も行われ、3日間で約380人が参加した。

■時代を読み取る  
同大の清家篤塾長は、開会式のあいさつで「慶応は戦災を大きく被った大学の一つ」と自己紹介した。末期に海軍が建設した地下壕が保存されている。連合艦隊司令部などの中枢機関が置かれ、レイテ沖海戦や沖田戦の指令が出された。戦後、進駐軍に接収された校舎も現存する。

■文化財への課題  
戦争遺跡の確たる定義はない。文化庁は「政治軍事」分野の近代遺跡を調査しているもの、その報告書は未刊。国の一定基準がない現状で、市町村による文化財指定も進まない。基調報告した同ネット代表の十藤駿武・山梨学院大学教授は「基準が明確でない

うして戦争が起ったのか、なぜ防げなかったのかを考えるため、保存する価値がある」と話した。また、記念講演した同大の白井厚名教授は、保存の重要性を指摘した上で、そこから時代状況を読み取る努力も呼び掛けた。「物それだけでは語れない。当時の思想や国民感情を考える感性を磨いてほしい」

ため、自治体によっては文化財指定の検討対象から外す、後ろ向き」の対応もみられる」と明かした。近同ネットの調べでは、近代以降の戦争遺跡のうち国や都道府県、市区町村指定した文化財は7月未現在、全国に188件。県内は9件にとどまる。日吉の地下壕や、謀略戦の拠点だった旧陸軍登戸研究所(川崎市多摩区、明治大が資料館として公開)は第一級の遺跡であるにもかかわらず、指定されていない。

顕彰、称揚のために利用されるケースがあることも踏まえ、十藤教授は「加害と被害の歴史をトータルに調べ(伝える)必要がある」と強調。学習や街づくりの一環で戦争遺跡をより活用していくべきとした。



④明治大が当時の建物を生かして昨年開設した「平和教育研究所資料館」  
⑤同館に展示されている艦船爆弾の模型。こうした遺跡の保存活用は現在、民間がリードしている

2011.8.17  
神奈川新聞

## 連載

### 地下壕設備アレコレ【その3】 バッテリー、トランス、交流直流変換機

山田 譲

前回に続いて電源用機械設備の話です。海軍が使っていたバッテリーは鉛蓄電池ですが、これは鉛と二酸化鉛の電極を希硫酸の電解液に浸したものです。起電力は2ボルトです。これを直列にならべて必要な電圧を得るわけです。放電すると希硫酸は水になり、電極はどちらも硫酸化鉛になります。両極に電圧をかけて充電するとともにもどります。充電が終わってもさらに電圧をかけつづけると、電解液中の水が電気分解されて酸素と水素が発生します。この水素がせまい地下壕の中にたまってしまうと、福島原発のように水素爆発をおこすので外に水素を逃がしてやらないといけません。これは軍艦内でも同じです。そのために日吉地下壕のバッテリー室の壁には斜めに排気口がついていて、寄宿舍に登る階段の途中につながっています。この水素排気については連合艦隊司令部情報参謀中島親孝氏の回想文にも「電池室の排気」と記されています。(慶應生協ニュース第44号)

外部から電源を引く場合、3300ボルト(現在は6600ボルトですが戦前は今の半分でした)の高圧線は変圧器で電圧を下げないといけません。また100ボルトの電灯線を引き込んでも、通信機用の電源は6ボルトと220ボルトですからやはり変圧は必要だったとおもわれます。ですからトランス(変圧器)がどこかにあったはずです。

また通信機やバッテリーは直流なので交流直流変換機も必要です。この機械は割りと簡単で、交流モーターと直流モーターのシャフト(回転軸)を直結させればよいのです。電気モーターと発電機は実は同じもので、外部電源で交流モーターを回し、その力で直流モーターの回転軸を回してやれば直流が発電されます。鶴見区にある東京電力の「電気史料館」には明治時代の実物が展示してあります。

お知らせ

**☆1 横浜の3つの外人墓地をめぐるバスツアーのお誘い**

横浜の中心街に、現在4ヶ所の外人墓地があるのをご存知ですか？一番有名なのは山手の外人墓地ですが、今回は、これ以外の「3つの外人墓地をめぐる」バスツアーを企画しました。昼食は中華街での定食を楽しみましょう。

日時 2011年11月20日(日) 8時30分～17時(予定)

場所 英連邦墓地—昼食(中華街)—根岸外人墓地—中華義荘

募集人数 25人(定員になり次第締めきります)

集合場所 慶應義塾日吉キャンパス 銀杏並木

集合時間 8時15分(集まり次第出発します)

案内 手塚 尚氏 神奈川県歴史教育者協議会会員

参加費 4千円(交通費・昼食代・保険代・資料代など)

★参加申し込み 葉書かファックスで11月5日までに下記に申し込んでください。

〒223-0064 横浜市港北区下田町5-20-15 亀岡敦子

T&F 045-561-2758

**☆2 《日吉をガイドする》**

講座のお知らせ 2011

2009年から、当会では「日吉をガイドする講座」と名付けた連続講座を年に2、3回、開いています。内容は地理学・考古学・歴史学・生物学と多岐にわたり、毎回会員の皆さまはじめ、多くの参加者を得て、楽しく有意義な学びの時を持っています。

今年は、太平洋戦争開戦から70年目の年であり、12月は学徒出陣の若者達が軍隊に入った月でもあります。第6回は白井厚氏の慶應義塾に重点をおいて学徒出陣についての講演を、第7回は、来年2月に大倉精神文化研究所の研究員林宏美氏の太平洋戦争末期に大倉山記念館(現)にきた海軍気象部についての講演を企画しました。どなたでも参加できますので、お誘いあわせの上是非ご参加ください。

**第6回 日吉をガイドする講座**

演題 慶應義塾における「学徒出陣」

講師 白井 厚氏 (慶應義塾大学名誉教授)

日時 2011年12月10日(土) 13時～15時

会場 慶應義塾日吉キャンパス 藤山記念館会議室

**第7回 日吉をガイドする講座**

演題 大倉山と海軍気象部

講師 林 宏美氏 (大倉精神文化研究所研究員)

日時 2012年2月25日(土) 13時～15時

会場 慶應義塾日吉キャンパス 来往舎大会議室

主催 日吉台地下壕保存の会

後援 港北区役所

☆事前申し込み不要 参加費無料

問合せ先 亀岡 (045-561-2758)



## 新刊案内

『本土決戦の虚像と実像』(高文研 2011.8) 1500円(税別)

[監修] 山田 朗 明治大学教授(日本近現代史)

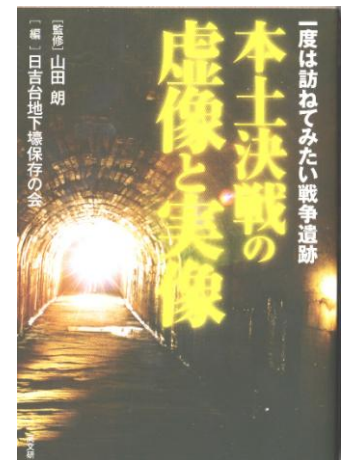
[編] 日吉台地下壕保存の会

## 内容と著者

☆はじめに

- I. 〈本土決戦〉とは何であったのか 山田朗
- II. 房総半島南部における本土決戦体制 愛沢伸雄
- III. 本土決戦に向けた海軍連合艦隊(海軍総隊)地下壕と三浦半島 新井揆博
- IV. 登戸研究所と謀略戦 渡辺賢二
- V. 国体護持に備えた松代大本営 目沢民雄
- VI. 人間の戦争遺跡・上原良司の思索 亀岡敦子
- ☆ 戦争と軍隊に関する歴史用語解説 梅田正己

戦争遺跡を透してみると、国民を総動員しての本土決戦体制の本質をみることができます。7人の共著で、当会の新井揆博と亀岡敦子がそれぞれ1章ずつ担当しています。一般書店で購入できますが、書店での購入が困難な方は亀岡(045-561-2758)までご相談ください。



## ☆☆活動の記録☆☆ (2011年6月～10月)

- 6/18 日吉の戦争遺跡が！養成講座 日吉の戦争遺跡の特徴とが！の心得Ⅱ  
箕輪町周辺の戦争遺跡見学 14名
- 6/20 運営委員会 会報102号発送(慶應高校物理教室)
- 6/24 平和のための戦争展 in よこはま実行委員会(かながわ県民ホールセンター)
- 6/25 定例見学会 47名
- 6/26 地下壕が！学習会(菊名フラット)
- 7/2 日吉の戦争遺跡が！養成講座 日吉台地下壕のが！実践・質疑討論  
藤山記念館・地下壕 7名
- 7/12 平和のための戦争展 in よこはま実行委員会(かながわ県民ホールセンター)
- 7/14 地下壕見学会 青葉区「いいところ探し」13名
- 7/15 運営委員会(慶應高校物理教室)
- 7/18 第15回戦争遺跡保存全国シンポジウム実行委員会(慶應高校物理教室)  
会場の下見(藤原洋記念ホール・来往舎)
- 7/22 地下壕見学会 かながわ医療生協 8名
- 7/23 定例見学会 42名
- 7/27 地下壕見学会 大綱中学校3年生・先生 6名
- 7/28 全国シンポジウム打ち合わせ(慶應高校物理教室)
- 7/30 夏休み地下壕見学会 35名
- 8/1 全国の戦争遺跡写真展 準備(来往舎イベントテラス)
- 8/2～7 全国の戦争遺跡写真展 (来往舎イベントテラス)
- 8/2 夏休み地下壕見学会・地下壕見学会ヒヨシエイジ 26名
- 8/4 夏休み地下壕見学会・地下壕見学会ヒヨシエイジ 44名  
全国大会準備作業(慶應高校物理教室)
- 8/5 全国大会準備作業(慶應高校物理教室)  
全国ネット運営委員会(来往舎大会議室)

- 『日吉台地下壕のがく事例集』発行
- 8/6～8 第15回戦争遺跡保存全国シンポジウム神奈川県横浜大会開催  
(参加者 延べ人数 600名)
- 8/6 見学会 日吉台地下壕(短縮コース) 54名  
全国ネット会員総会(来往舎大会議室) 大会第1部～3部(協生館藤原洋記念ホール) 交流会(慶應義塾生協食堂)
- 8/7 分科会(第1～第3 来往舎大会議室・中会議室・シンポジウムスペース)
- 8/8 見学会  
日吉台地下壕 43名 ・ 明治大学平和教育登戸研究所資料館 46名  
貝山地下壕他 31名 ・ 横須賀軍港他 26名
- 8/25 運営委員会(日吉地区センター)
- 8/27 地下壕がく学習会(菊名フラット)
- 8/31 地下壕見学会 港北区ボランティアがく 17名
- 9/1 地下壕見学会 武相歴史研究会 3名
- 9/10 10/1のヒヨシエイジ準備会(日吉地区センター) 長谷川
- 9/14 日吉地区センター自主事業 日吉台地下壕見学 ①事前学習(日吉地区センター)  
39名 茂呂・喜田  
地下壕見学会 港北区小学校社会科研修 18名
- 9/15 地下壕見学会 愛知学院大学後藤ゼミ 25名
- 9/20 運営委員会(慶應高校物理教室)
- 9/21 地下壕見学会 日吉地区センター自主事業② 43名
- 9/24 定例見学会 36名(今川善司元少尉ご夫妻が参加 1944.10 から日吉勤務)
- 10/1 日吉フェスタ参加 展示・書籍販売(ヒヨシエイジ主催・日吉キャンパス)  
寄宿舍南寮見学 運営委員 6名(連合艦隊が使用した寄宿舍南寮の改装工事を控えて現況を見学)
- 10/5 地下壕見学会 日吉台小学校6年生 112名 先生 3名
- 10/6 地下壕見学会 神奈川県立大師高校1年生 12名 先生 1名
- 10/7 地下壕見学会 慶應大学 38年度卒高木会 22名

## 予 定

- 10/14 運営委員会 会報 103号発送(慶應高校物理教室)
- ☆ 地下壕見学会 定例見学会 毎月第4土曜日 13時～  
10/22 ・ 11/26 ・ 12/17(第3土曜日) ・ 1/28

## ☆地下壕見学会は予約申込が必要です。

お問い合わせは見学会窓口まで ☎045-562-0443(喜田 午前・夜間)

連絡先(会計) 亀岡敦子: ☎223-0064 横浜市港北区下田町 5-20-15 TEL 045-561-2758  
(見学会・その他) 喜田美登里: 横浜市港北区下田町 2-1-33 TEL 045-562-0443  
ホームページ・アドレス: <http://hiyoshidai-chikagou.net/>

日吉台地下壕保存の会会報 (年会費) 一口千円以上  
発行 日吉台地下壕保存の会 郵便振込口座番号 00250-2-74921  
代表 大西章 (加入者名) 日吉台地下壕保存の会  
日吉台地下壕保存の会運営委員会